

## 夏目漱石小論

——『野分』成立とその周辺——

戸田民子

○ 「野分」は明治四十年一月、『ホトトギス』に発表された。この作品の作意を漱石は、「近々『現代の青年に告ぐ』と云ふ文章をかくか又は主其意を小説にしたい」(明39・10・17)と書簡で高浜虚子に予告した。

しかし、この「近々」は大幅に遅れ、実際の起筆は原稿締切日(明39・12・20)<sup>(1)</sup>間際の十二月九日であった。

予告から五十有余日経て、漸く起筆がなされた事情についての従来の考察は、管見によれば次の二説に代表される。一は、漱石の「色々用事があつてね 早くは出来さうもない」(明39・11・11)との虚子宛書簡に着目し、「色々用事」を、『文学論』原稿の校閲・講義ノートの作成・転居のための家探し・家族の病氣等々を指摘し、これが執筆を遅らせた要因とする小宮豊隆の意見。<sup>(3)</sup>一は、漱石が「あの『現代の青年に告ぐ』主意を執筆することをあきらかにした直後の、森田草平との手紙の往復から、突如として」混乱がおこり、それが延いては「野分」の構成に「不透明さ」を生

ぜしめたとする玉井啓之の意見である。<sup>(4)</sup>

偶然の齎した結果とはいえ、物理的要因として小宮説、精神的要因として玉井説をあげた時、実に判然と整理のつくことに驚かされる。が、筆者には精神的要因に今一つの理由があるように思われる。そこで今ここに、改めてその理由を追尋することにし、それによって「野分」が当初の漱石の作意とどのような相違を見せるかを考察してみたいと思う。

### 一

周知のように英国留学を終えて帰国した漱石は、第一高等学校・東京帝国大学等教職にあった傍ら、小説を書き始め「吾輩は猫である」(『ホトトギス』明38・1)明39・9)で一躍名声を挙げた。爾後、矢継ぎ早の作品発表を行い、いよいよその名を高くし、その地位を明確にしたのは明治三十九年九月、『新小説』に発表した「草枕」においてである。(云うまでもなく「野分」はこの年の十二月に執筆されたものである。)



この「草枕」発表の一年前頃より、漱石の身邊には彼を敬慕して多くの秀れた青年達が近づいて来た。所謂漱石山脈に列なる人達も、青年としてこの時期に接近が始まった。しかし、彼等のように漱石に好意をもつて近づき、漱石からも好感をもつて迎えられた青年達があった一方には、漱石をして不快ならしめる青年群のあったことも事実である。それは、「今の青年は(中略)カラ駄目だ。生意気な許りだ」(明39・10・9 高浜虚子宛・「未来の日本を作る青年が自己の責任もエライ事も何も知らずにワー／＼して居る」(明39・10・20 野間真綱宛)の書簡から、又「講義の当時は余が予期せる程の刺激を学生諸子に与へざりしに(中略)如何に不愉快のうちに講述せられ」(『文学論』序 明39・11) とか等の文章からも推察できる。

冒頭で述べたように、「野分」の作意は「現代の青年に告ぐ」である。そして漱石のいう「現代の青年」の対象は、右に述べた「カラ駄目だ」の青年達である。と同時に、漱石の念頭には当然の帰結として彼自身の青年時代があったであろう。更には「現代の青年」と、自己のそれとの対比の上での右の発言であつたであろうことは想像に難くない。しかし、この発言をした時点での漱石には、後に述べるような深刻な事態に陥る程の己が青年時代の回顧にはまだ至っていなかった。従つて、森田草平への書簡「満腔の同情を以てあの手紙をよみ満腹の同情を以てサキ棄てた」(明39・10・22)も、確かにこの一文のみを読めば、漱石は森田の告白―出生の秘密―に大なる衝撃を受けたかに見える。しかし、

続けて書いた次の文章

余の知る人のうちに、二三君と同様の境遇の人あり。否境遇の人なりときく。去れど彼等は皆相応に成功の人なり。君も相応に成功の緒を得ば此不幸を忘るゝを得んか。(中略)君が生涯は是からである。功業は百歳の後に価値が定まる(中略)余は吾文を以て百代の後に伝へんと欲するの野心家なり。(傍点筆者 以下同断)

を見てみると、それは森田を激励しながら実は、明治の文学は是からである。今迄は眼も鼻もない時代である。是から若い人々が大学から輩出して明治の文学を大成するのである(中略)僕も(中略)死ぬ迄後進諸君の為に路を切り開いて、幾多の天才の為に大なる舞台の下ごしらへをして働きたい。

(明39・10・10 若杉三郎宛書簡)

と同じく、着実に自己の確立という「野分」の主題を固めていつている文章であることがわかる。又、「今度の小説中には平生僕が君に話す様な議論をする男や、夫から経歴が(人間は知らず)君に似てゐる男が出て来る。自然の勢何となしにさうなるのだから君や僕の事と思つちやいけない」(明39・12・10)との森田宛書簡をもつて、高柳周作を森田草平と即断するのも、

君の手紙や小宮の手紙を小説(『三四郎』 筆者註)のうちに使はうかと思ふ。近頃は十分ずるくなつて何ぞといふと手近なものを種にしやうと云ふ癖が出来た。(明41・7・31 鈴木三重吉宛 書簡)



の例にも見えるように問題がある。これはあくまでも取材方法の一端である。こうしたことを考えてみれば、森田との往復書簡にのみ執するのはいかなるものであろうか。ことに「野分」における白井道也の占める位置の大きさを思えば、なおのことそう思われる。

## 二

それでは一体何に因って漱石は、かなりの纏まりを見せていた「野分」の構想を、根底から覆され、遂には混乱のまま当初のモチーフにズレを見せながら、タイムリミット―原稿締切日―という物理的事情で執筆を開始したのであろうか。

狩野さんから手紙が来た。そこで何の用事かと思つて聞いて見たら用事ではなくて只の通信であつた。夫で僕は驚ろいた。

これは、明治三十九年十月二十三日付で漱石が、当時京都帝國大学初代文科大学長であつた大学以来の友人狩野亨吉に宛てた書簡の冒頭箇所である。この日漱石は、「用事がなければ手紙を書く人ではない」と思い込んでいた亨吉から、思いがけず「只の通信」を貰つた。亨吉が何故手紙を寄こしたかについて漱石は、「狩野さんが余つ程閑日月が出来たか然らずんば京都の空気を吸つて突然文学的になつて」、「僕の島の方へ近付いて来た」と一方的判断を下し、大変な喜びを見せた。

周知のように、この日の漱石の返書は二信に亘つて綴られた実に長文のものである。この中で注目すべきは、第一信の内容を更

に詳述した第二信であろう。亨吉を「尤も理窟の分つた人間だと認めるからして又僕の生活の長部分を、知つてゐる」、人物、と判断した漱石は、「君の朋友なる夏目といふ人間はこんな男であるといふ事を紹介」するために長文を認めた。その主旨は、「余は比較的ハームレスな男である。進んで人と争ふを好まねばこそ（中略）退いて只一人安きを得ればよいと云ふ謙遜な態度で」十年前東京を捨てた。しかし、「今の僕は松山へ行つた時の僕ではない。（中略）どんな事があらうとも十年前の事実は繰り返すまい。今迄は己れの如何に偉大なるかを試す機会がなかつた。己れを信頼した事が一度もなかつた。朋友の同情とか目上の御情とか、近所近辺の好意とかを頼りにして生活しやうとのみ生活してゐた。是からは、そんなものは決してあてにしない（中略）余は余一人で行く所迄行つて、行き尽いた所で斃れるのである。それでなくては真に生活の意味が分らない」である。すなわち漱石は、十年前の自分と今日の自分とは、白井道也が「あの時分は今とは大分考へも違つてゐた」（三）と思うように、漱石もまた余程考えが変わつたということを、繰り返し例を挙げ詳述したものである。

「野分」の構想を考案中であつた漱石のもとへ、まさに偶然、亨吉から来信があつた。それを契機に漱石は、自身の青年時代の生き方を、改めて凝視し整理報告することを決意した。と同時に漱石は、

毎日鏡ヲ見ル者ハ昨日ノ吾ト今日ノ吾ト同ジト思ヘリ。今日の吾と明日の吾トモ同ジ者と思ヘリ。かくして十年立つて始メ



十年前の吾の大ニ異ナルヲ悟ル。明治ノ世ニ住ム者モ斯ノ如シ。今年ハ明年の如ク又昨年ニ似タリト思ヘリ。明治四十年ニナツテ明治元年ヲ回顧シタル片始メテ其変化ノ大ナルニ驚ロク。  
 『断片』明治三十九年

や、

明治ノ三十九年ニハ過去ナシ。単ニ過去ナキノミナラズ又現在ナシ、只未来アルノミ。『断片』明治三十九年

あるいは、

自己ハ過去ト未来ノ一連鎖ナリ。／(1)ワレハ親ノ為ニ生存スルカ／(2)ワレハ自己ヲ樹立センガ為メニ生存スルカ／(3)ワレハ子ノ為メニ生存スルカ『断片』明治三十九年

という「野分」のモチーフに重要な関係を見せる一文を、既に十年前にもものしていたことを思い出した筈である。それは、

われ一転せば猿たらんわれ一転せば神たらんわが既住三十年刻して眉宇の間にあり明鏡の裡われ焉んぞわれを斯き得ん猿の同類か神の親戚か須らく自家の眼面を熟視して推量一番せよわれはわが父母の墓碑銘わが子はわが伝記抄録なり(中略)父母の榮耀を受継ぎ之を子孫に譲るが能なればわれば唯一個の電信線に過ぎざらん

という明治三十年一月に書いた『無題』である。そして、十年前の漱石は折角自己の確立を萌芽させたにもかかわらず、右の文章の表現方法やあるいは續けてそこに書いた「漱石子遂に猿に退化せんか將た神に昇進せんか抑も亦元々阿弥か南無愚陀仏ノ生れ得

てわれ御目出度顔の春」をみても窺えるように、所謂俳句趣味の世界に徘徊していた。が、しかし、大切なことは、漱石が十年前に萌芽させ潜在意識として内包し続けてきた自己認識を、改めて喚起させ、更には立ち向かわせる決意をさせた人が狩野亨吉であったということである。

### 三

一方、右の亨吉宛書簡で今一点看過できないことがある。それは、本稿第一章で既述した十月二十二日夜中に森田草平がかいた手紙が告白であったと同様に、漱石のこの書簡も又亨吉に対する告白であると考えられる点である。「卒業論文をよんで居ると頭脳が論文的になつて仕舞には自分も何か英語で論文でも書いて見たくなります(中略)僕は何でも人の真似がしたくなる男と見える泥棒と三日居れば必ず泥棒になります」(明39・5・19 虚子宛書簡)という漱石の性癖を考えれば、この日の告白には前日の森田のそれが少なからず影響したであらうことは否めない。

しかし「野分」の人物形象を考えた時、従来よく言われる所謂モデル論としての白井道也―漱石・高柳周作―森田説は、この時点―漱石が亨吉に返書を認めた段階―で崩れることになる。そしてこの時点で、漱石は、新たに有意無意識裡に白井道也の中に亨吉を―高柳周作の中に森田のみならず漱石自身を投影させたように―自己と二重写しの形で浮上させた。これは一面において、道也の中から漱石自身の後退を意味する。更にこれは、漱石自身が「現



#### 四

代の青年に告ぐ」るものが、稀薄になったことを意味する。それを端的に顯わしたものが、四日後、鈴木三重吉から人生の先輩として教訓を求められた時の言葉、「僕に教訓なんて飛んでもない事だ。僕は人の教訓になる様な行をして居らん」(明39・10・26)である。更にそれをより判然とさせたのは、「只一つ君に教訓したき事がある。是は僕から教へてもらつて決して損のない事」で始まる三重吉への「第二信」である。

「第二信」を読んで気づくことは、結局この書簡はその四日前、亨吉に宛てた返書内容の再確認であるということである。亨吉に、「どの位人が自分の感化をうけて、どの位自分が社会的分子となつて未来の青年の肉や血となつて生存し得るかをためして見たい」と述べたと同じことを三重吉にも「維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつて見たい」と述べたのである。そして、この書簡は、自己の青年時代の轍を現代の青年に踏んでもらいたくないと、の外に向けての願望、あるいは教訓ではなくむしろ漱石自身の内に向けての内的決意表明である。そうでなければ、すなわち、もし右の書簡が外向的なものであったならば、そして真に「現代の青年に告ぐ」ものであったならば、当然漱石はこの時期に「野分」の執筆を開始していた筈である。

問題はむしろ、自己内部の認識及び決意をどうして漱石は「教訓」という表現にしてしまったかではなからうか。

○岩田の手紙中に第一程学校らしからぬ学校はなく第一の教師程教師らしからぬはなしと有之實際左程に候や随分御骨の折れる事と存候邦家の為御改革可然かと申せば世の中の学校は大概こんなものと御返答あるべければ其辺の事は別段申上まじく候  
(明32・2・5 亨吉宛書簡)

○万古不易と云ふべき代物(明36・7・3 菅虎雄宛書簡)

○狩野さんと云ふ人は用事がなければ手紙をかく人ではない。

しかも其手紙たるや官庁の通牒的なものに限ると思つて居た

(明39・10・23 亨吉宛書簡)

右の例文は、明治三十九年十月二十三日迄の漱石の描いた狩野亨吉像である。この亨吉像をもって漱石が、その作品の中で初めて亨吉を具体的に形象させたのが、「猫」における八木独仙である。

独仙は、「夢に迄肝癪を起」こす程になった苦沙弥に対して、

「びん助やきしやごが何を云つたつて知らん顔をして居ればいゝぢやないか。どうせ下らんのだから(中略)人が気に喰はん、喧嘩をする、先方が閉口しない、法廷へ訴へる、法廷で勝つ、夫で落着と思ふのは間違さ。心の落着は死ぬ迄焦つたつて片付く事があるものか(中略)山があつて隣国へ行かれなければ、山を崩すと云ふ考を起す代りに、隣国へ行かんでも困らないと云ふ工夫をする。山を越さなくとも満足だと云ふ心持を養成するのだ」と述べ、



「消極的の修養で安心を得ろ」(八)と説教をする。<sup>(8)</sup>

そうした悟達の人と思い込んでいた人物から、「只の手紙」がきて、拘泥する人漱石は感激し、既述のような長文を書いた。この長文を書き終えた時、漱石には心中密かに期することがあったのではなからうか。それは、すなわち、亨吉からの返書である。丁度森田の告白に対して自分が実に丁寧な返書を認めたように。しかし、亨吉からの返事はなかった。

このことが又漱石には「只の手紙」を貰った時以上に大きな衝撃を与えることになった。変わらぬ人(亨吉)が、応変したと早合点した自分の判断の甘さに、そして「朋友の同情とか目上の御情」と訣別した筈の自分が、又々それを求めていたことに対して漱石は強い衝撃をうけた。しかもこの時期漱石は、まだ「個人主義は人を目標として向背を決する前に、まづ理非を明らかに、去就を定めるのだから、或場合にはたつた一人ばつちになつて、淋しい心持がするので」(『私の個人主義』大4・3・22)や、「私は淋しい人間です」(七)という「こゝろ」(大3・4・20・同・8・11)の先生の境地に至っていなかった。従つて非常に激しい思いが漱石の脳裡を去来した。三重吉にあの手紙を書かせ、更には「激越悲壮」な「『文学論』序」(明39・11)を同時期に書かせることになったのも、偏にこの衝撃が原因となった。

## 五

漱石が大学を卒業後、松山↓熊本↓英国↓東京と動いたように、

## 五〇

亨吉もまた卒業後金沢↓熊本↓東京↓京都を遍歴した。周知のようにこの二人は熊本・東京では同じ学校に籍をおいている。―第五高等学校へは漱石が、第一高等学校へは亨吉が、各々を招聘した。<sup>(10)</sup>―「東西に徂徠」(『文学論』序)してきたという経歴上の意味においてよく似た二人は、徂徠の後東京に戻った。丁度「八年前大学を卒業してから田舎の中学を二三箇所流して歩いた末、去年の春飄然と東京へ戻つて来た」白井道也を、「道也の進退をかく形容するの適否は作者と雖ども受合はぬ」(一)と漱石が云うように、二人は最終的には東京へ戻つてきて、以後東京を動かない。また漱石が明治四十年四月、一切の教職を捨てて東京朝日新聞社に入社し、「筆の力」で社会に立ち向かうことを決意した時、亨吉も又京都帝国大学文科大学長を辞する決意(辞職は翌四十一年)をしている。

ただし、漱石が「米塩の資に窮せぬ位の給料をくれる」(『入社』の辞「明40・5・3」)や、坂元(當時白七)三郎に宛てた実に精細な身分保証の問い合わせ書簡(明40・3・11)に見られるような、生活設計を十分に考えた上での辞職に対して、亨吉の場合はそうしたことを全く度外視した辞職であった。<sup>(11)</sup>しかも亨吉は、この京都を退いて後、没するまでの三十五年間、一切公的地位につくことを潔しとせず、市井の片隅に隠栖してしまふのに対して漱石は、終生世間より脚光を浴び続けた。経歴上からは相似た二人もよく見ると、このように、在野の人のなり方に大きな相違―似て非なるもの―が見られる。



明治二十七年三月、金沢―第四高等学校―を辭職して以來亨吉は、「浪人となつて居たが仕官の望み」は「なかつた」(『沢柳君と余との關係』)。それは、「教育に従事するの念既に薄らぎ今や他の方面に向へんとする」(明30・1・7 日記)志をもつていたからだと亨吉は説明する。その間四年に亘る亨吉の浪人暮らしは、熱心に集めた書籍を「乏費を補へんため」(明29・3・16 日記)「究乏を救へんため」(同・4・12 日記)に売却して、漸う凌いでいくことが出来る程の慘憺たるものであった。この窮状を見かねた友人達が持ち込んでくる糊口話しに對する亨吉の反應は、常に、「窮乏せりと雖ども饑飢に瀕せず」(明30・5・26 日記)であつた。亨吉が固辭して動かないのは、決して「教育に従事するの念」が薄らいだからではなく、金沢で経験した体制側に与することのできない自分の性情が、大きくかわつてきていることは想像に難くない。

この亨吉がその倭心ならずも教職に身を置いたのは、物理的には極貧からの脱出、精神的には「教育に従事するの念」の理由からと考へられる。しかし亨吉の心中には野に下り、一市井人として生涯を送りたいとの考へが常に働いていた。それだけ亨吉には、公序の中に身を置き難い思想上の理由があつたのである。

従つて、漱石が亨吉に与えた書簡を書いた時も既に亨吉は、私人として生きる準備を始めていたわけである。そういう彼の所へ、激烈な手紙がきても、亨吉には返事の仕様もなかつた。更には、漱石が「殻気箴」を吐いた内容を、亨吉は既に十年前に経験し、

整理し終えていた。このことは、金沢を引きあげる日の次の日記に詳らかにである。すなわち、

嗚呼余の事を避け生を養へんとつとむる一日にあらざしかも世間の事しうねく心に纏ひ過ぎにし経験を憶へば胸を圧し來らん境遇を察すれば氣を苦しむるのみ多かりいでばれしき憂を去りたゞよはしき慮を遣り如意の精神を守らん(中略)まづしき生活を送るとも何をか慨かん分に應じてやましき心を出さじは帝王たるに勝れりうしろめたき企謀に敗れたるも何をか恨まん人知らずとも天の判決あり今我斯道の端に出て遙に如意の光明を認む車馬の達すべきにあらず權勢の致すべきにあらず百難前途を障きり衆人実在を疑ふしかもよく極地に達し之に浴すものあらば其人万丈の光焰を發し普く三世十界を照し無量の功德を布かんわが退官の本因ハここに関はれり我時を俟て釈迦耶蘇の道を發揮し無明罪過の出路を壅塞し一切有情をして等しく如意自在の真願を起さしめ不可思議の清淨樂を得せしめん(明27・4・20)

である。傍点箇所を示された亨吉の激しい苦悶を漱石は気づいていなかったようである。漱石は、亨吉の形式的辭任の理由「家事の爲金沢に仕留するを能はざる」(明27・3・21 日記)を額面通り受けとり、窮乏生活を送つていても、悟達の人と亨吉を見ていた。この理解の仕方をもつて漱石は、白井道也を「世間が己れを容れぬから仕方がないのである。世が容れぬなら何故こちらから世に容れられやうとはせぬ?世に容れられ様とする刹那に道也は奇麗



に消滅して仕舞ふ」(一)と形象して「野分」に登場させたのである。

## 六

世間から見事に「消滅して仁舞ふ」人は狩野亨吉であつて、白井道也ではない。道也は江湖の処士とはなつたが、「筆の力」で再び世間に出ていく人である。その理由を道也は「同情は正しき所、高き所、物の理窟のよく分かる所に聚まると早合点して、此年を今度こそ、今度こそと、経験の足らぬ吾身に、待ち受けたのは生涯の誤りである(中略)落ち付いて住めぬ世を住める様にしてやるのが天下の士の仕事である」(二)と、社会的使命観から説く。この道也の考えは、本稿第二章に既述した漱石の亨吉宛書簡内容と同一である。すなわち、世間に出ていく人道也は漱石その人である。先に(五章)出処を例にとつて二人の相違をみたが、ここにも又右のような相違が見られた。更にもう一点、対社会観で二人の相違を明示するものとして「学習院」を例にあげてみたい。なぜならば、二人が大学を辞職した理由が共に大学(官界)に対する不満であつたことに重要な意味があると考えるからである。すなわち、二人の辞職行為は国家体制からの離脱の実践であるということである。所謂明治の知識人としての二人が野に下り、自由人となつて明治という時代をどのように見ていたか。これを、明治の国家体制の象徴的存在の一つとしての「学習院」を例にあげて考えたいと思うからである。

漱石は、白井道也の口を借りて「明治四十年の日月は、明治開

化の初期である(中略)政治家は一大事業をした積りで居る。学者も一大事業をした積りで居る。実業家も軍人もみんな一大事業をした積りで居る。した積りで居るがそれは自分の積りである。明治四十年の天地に首を突き込んで居るから、した積りになるのである。

——弾指の間に何が出来る」(十二)と、明治の近代化を批判した。漱石が命を受け英国に留学し、「ある日本人は書を本国に致して余を狂気なり」と伝えられる程、また「英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営」(『文学論』序)んで迄、必死に勉強したのは明治の知識人に通有する国家意識からであつた。決して「積り」意識の近代化に貢献するためではなかつた。しかし、明治四十年の日月は「積り」の儘エセ近代化が進められていった。それを推進した人物達の中枢機関として「学習院」は位置していた。

明治二十六年八月、漱石は学習院に就職が決まりかけていた。

しかし、「朝寄宿舍に夏目を訪ふ(中略)留守中村田来る午後四時亦来云ふ学習院の位地終に重見に帰し夏目へ遂に敗れたり是偏に工藤の奸計に出るなりと」(明治26・8・24 亨吉日記)や、「学習院の方は落第と事が極つた」(『私の個人主義』)に見られるように、不首尾に終わった。その学習院に漱石は、大正四年三月講演のため出向いている。その理由を漱石は、学習院という学校は「社会的地位の好い人が這入る学校のやうに世間から見做されて居り、

「向後貴方がたに附随してくるものゝうちで第一番に挙げなければならぬのは権力であり、」貴方がたは正しく妨害(他人の自我



を妨害 筆者註 し得る地位に将来立つ人が多いからです。貴方がたのうちには権力を用ひ得る人があり、又金力を用ひ得る人が沢山ある」だから、そういう「貴方がた」に自分は、「自己の個性の發展を仕遂げやうと思ふならば、同時に他人の個性も尊重しなければならぬ」『私の個人主義』ことを話したと説明している。漱石のこの言動は、「筆の力」で外に出る白井道也の意圖及び行動力と合致する。

## 七

第四高等学校を辞して浪人していた亨吉のもとへ多くの仕官の口が寄せられたことは、そしてそれを辞退する理由も「饑飢に瀕せず」で徹したことは既に見てきた通りである。そうした中で、唯一つ招聘の経過及び断りの理由を詳述したものがあつた。それは明治二十九年七月二十四日の日記「朝大村仁太郎近衛学習院長の書を齎らし来り亦就任を勧誘す」に見られる学習院であつた。

それによると亨吉は、「学習院ハ皇子皇族をも入学せしむるところ」であり、「皇尊に対する敬礼の如き臣民平族の一般守るべき者孰にあるも遵へざるべけんや」、また学習院は「高等社会の子弟を熏陶するところ」であつて、「教職にあるもの其責任大なること共に又社会に及ぼす偉大の勢力を有す曠昔教訓を施せる者明日將に国家の枢機をとる者」が多くいる学校だから就任せよと誘われた。これに対して亨吉は、

我生れて貧賤に長じ世慾を増長するの縁に遇はず故に又交礼

を修むるの意なし唯一時誤て教学の任に当り自から勤め自から慎み守つて寸毫を失はんことを懼れなりきしかも志へ常に余を駆て江湖に優遊して自適せしめんとす此志を害することなくして我微力を致すところならば我之を辞せし何をか我志を害せずとなす

と断わり、まげて就任せよというなら、学習院では「我をして万事を裁制せしむる可なり」、しかし「世間果して此の如きことあらんや」と止を刺している。

亨吉が学習院を辞退したのは「江湖に優遊して自適せしめん」ためではない。後年「自分は危険思想の持ち主だから」を表面上の理由として、皇太子の教育係を断つた時と同じく、亨吉の真意は国家体制の外側にあつて黙して語らずの体制批判があつたのである。そして行動する漱石は、静止して動かぬ亨吉を解脱の人と判断した。十月二十三日の手紙に対する返書がなかつたことで漱石はいよいよその念を強くした。

## 八

漱石が亨吉に比して、明治の近代化に貢献しなければならぬという国家意識表明がより著しいのは、近代化を疾くに成し遂げていた英国を、目のあたりに見聞してきたからであることは想像に難くない。いかに不快極まる三年間の留学生生活であつたとはいえ、漱石は見るべきは学ぶべきはキチンと見てきていた。その国家意識をもって「筆の力」で「現代の青年」に告げようとした時、端



なくも狩野亨吉から手紙がきた。正にこの手紙が舞い込んで来たがために漱石は、以上に述べてきた如く、「現代の青年に告ぐ」人白井道也の人物形象に諸々の矛盾及び混乱を生ぜしめることになったのである。

すなわち漱石は、自己の一面（拘泥する人）を道也に投影させる一方で、亨吉の一面（解脱の人）を理想的人物・かくありたき人・願望の対象として影が形に沿うように、道也の中に仮託した。これは当然二人の人物で形象しなければならぬ筈のものである。それを漱石は道也一人に表現を試みた。このことがすなわち、「野分」の執筆を遅らせ、更には構成上にズレをもたらすことになったのである。

静止して動かぬ人の内面にも大きな罅りのあることに気が付き始めた漱石は、『三四郎』の広田先生を描き、そして『野分』における白井道也の二面性を、『こゝろ』の先生―漱石―と―狩野亨吉―で初めて描き分けたのである。

- (1) 「ホト、ギスの方も漸の事で十二月二十日〔迄〕待つて貰ひました」(明 39・11・30 片上伸宛書簡)
- (2) 「愈本日曜からホト、ギスに取りかかりました」(明 39・12・10 月 高浜虚子宛書簡)
- (3) 小宮豊隆『漱石の芸術』(昭 17・12 岩波書店)の 100-103 頁。
- (4) 玉井啓之『夏目漱石論』(昭 51・10 桜楓社)の 39 頁。
- (5) 同右。
- (6) 大学時代『哲学雑誌』の編集委員として知己を得た漱石と亨吉の交際は、明治二十六年夏、「紀元会」の結成で、より親しさを増し

た。このことは既に拙稿「夏目漱石と狩野亨吉」(『論究日本文学』第四十一号―一九七八年五月―)に詳述したので、重複を避けるため本稿では二人の人生観及び社会観を中心に論をすすめる。

(7) 越智治雄『漱石私論』(昭 46・6 角川書店)の 81 頁。

(8) (6)に既出の拙稿参照。

(9) 小宮豊隆『文学論』解説(新書版漱石全集―全三十四卷―第八卷 昭 32・2 岩波書店)の 57 頁。

(10) 明治三十年十二月七日付狩野亨吉宛書簡及び、明治三十四年二月九日付狩野亨吉他三名宛書簡参照。

(11) 京都を辞職した時のみならず、亨吉の場合は常に窮乏していた。亨吉の日記には、書籍を売却したり「金子ノ借用ヲ依頼スル」(明 39・12・15)の類をよく見る。

(12) 高等遊民の雄として描かれた「それから」(明 42・6・27-10・14)の代助が、「今日に不自由のないものが、何を苦しんで劣等な経験を嘗めるものか」(二)と云って職に就かなかったことと対照してみれば、ここにも漱石と亨吉の比ができる。

(13) 明治三十一年一月、第五高等学校。同年十一月、第一高等学校。明治三十九年七月、京都帝国大学文科大学。

(14) 大正二年「東宮御学問所の御教育係りの一人として浜尾・山川が斯の人ならではと期せずして一致したのが、人格、学問、識見に申分ない哲人狩野亨吉博士であった。(中略)然し狩野先生は狩野先生で極力固辞し続けた。理由は、自分は唯物論者である。他の日皇室に累を及ぼすことがあっては不忠この上ない」(辰野隆『青春回顧』の 64-65 頁。

(\*) 狩野亨吉の年譜は『狩野亨吉遺文集』(昭 33・11 岩波書店)の『年譜』に従った。

(とだ・たみこ 夙川学院短期大学助教授)